

# 運動領域からみた教科体育の意識（第2報）

——教職経験別からみた器械運動の意識を中心として——

阿部正臣・梶原洋子・木一郎

## Consciousness of Physical Education Saw from the Field of Physical Activities in Elementary School Teachers(2)

——A Study of the Apparatus by the Teachers Career——

Masaomi Abe, Yoko Kajiwara, and Ichiro Shimeki

### 序

昭和52年改訂の小学校学習指導要領の体育科の記述には、`運動の楽しさ、`という言葉が随所にみられる。これは、これまでの運動技能の上達と体力づくりの重視から運動の楽しさや生涯体育の重視へと重点の置き方が変わってきていることを意味するものである。

体育科では、運動の特性を児童の立場から見直し、児童に運動の喜び・楽しさを味わわせるような主体的な学習活動が、日常生活の運動の継続へと連なり、それがさらに、生涯体育へと発展することをねらっている。

わが国の学習指導要領は、学校における教育課程（カリキュラム）作成の基準となるものであり、その方針や内容の考え方は、学校教育関係者に大きな影響を与えるものである。

そこで、本研究では、小学校教諭を対象に、特に、器械運動の領域の指導に対する意識とその指導の実態を調査分析し、器械運動の指導の現状を把握するとともに、学習指導要領の趣旨を教諭がどのように受けとめ、どのように体育指導に反映させているかなどあわせて調査分析するものである。また、これにより、初等教員養成課程のカリキュラム検討の

ための基礎資料を得ようとするものである。

既に、本研究第1報では、①女子教諭に器械運動の指導の苦手意識がうかがわれ、内容別では、鉄棒運動にその傾向が顕著であること ②学習指導要領改訂に対する意識の変化・変容については、女子より男子教諭に変化・変容を認める者が多いこと ③年間授業時数、単元の配列、単元の構成の仕方には男女による差異が認められなかったこと ④学習課題の設定などから、器械運動を克服的スポーツとして扱うという考え方に立って指導していない教諭がみうけられ、いまだ、学習指導要領改訂の趣旨が十分浸透しているとはいえない現状にあることなどの結果を得ている。

本研究第2報では、引き続き第1報を手がかりとして、未解明であった教職経験別の器械運動に対する意識とその指導の実態について調査分析していきたい。

### 研究方法

#### 1. 対象者

埼玉県下を中心とする現職の第4・5・6学年担当の小学校教諭290名のうち、教職経験年数10年以上の者（以降、これを「A群」とする）及び5年未満の者（以降、これを

「B群」とする)を抽出し、この両群を比較検討した。有効数はA群114名(男子62名,女子52名),B群92名(男子56名,女子36名)である。対象者の内訳は、表1に示すとおりである。

## 2. 調査期間

(1)昭和57年10月~11月

(2)昭和59年10月~11月

## 3. 調査方法

無記名の質問紙法による配票及び郵送調査

## 4. 調査項目

### ○器械運動の指導に対する意識

①体育及び器械運動の好嫌度とその指導の難易性 ②学習指導要領改訂に対する意識の変化・変容 ③器械運動の指導の期待など

### ○器械運動の指導の実態

①目標の設定及び学習指導計画立案の有無 ②年間授業時数 ③学習指導の期間 ④単元構成 ⑤単元の配列 ⑥学習形態 ⑦示範の状況 ⑧学習カード使用状況 ⑨学習課題の設定の仕方 ⑩評価の観点 ⑪授業中の取り扱った単独技及び連続技など

## 5. 結果の処理

調査結果は各項目毎に男女別,担当学年別,年齢別,教職経験別などを算出した。

表1 対象者の年齢・教職経験年数

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
年齢 (歳)	$\bar{x}$		40.6	25.2	40.7	25.3	40.6	25.1
	S.D.		8.06	1.91	8.11	1.74	8.10	2.17
教職 経験 (年)	$\bar{x}$		18.5	2.7	18.8	2.7	18.5	2.8
	S.D.		8.62	1.22	8.87	1.40	8.44	1.25

## 結果と考察

### 1. 器械運動の指導に対する意識

#### (1) 器械運動の指導の難易性

器械運動の指導に対する意識調査に先立って、まず、体育の好嫌意識及び体育の指導の難易性について調査した。

体育の好き・嫌いにおいては、男女の両群とも体育をかなり肯定的に受けとめ、両群間には差異は認められなかった。しかし、体育の指導の難易性においては、男子に教職経験による差異が認められ、B群よりA群に指導に対する自信がうかがわれる(表2,表3)。

次に、本題に入る第一歩として、器械運動の指導の難易性について調査したが、さきの体育の指導の難易性と同様、男子に差異が認められ、B群よりA群に指導に対する自信がうかがわれる。しかし男女の両群とも体育の指導の難易性の比率に比べ、器械運動では指導が「しやすい」の比率が減少し、男子にその傾向が強くみられた(表4)。

さらに、器械運動の内容別に、指導の難易性をみてみると男子に差異が認められ、いずれの内容ともA群の方が自信をもって指導していることがわかる。

しかし、鉄棒運動は男女の両群とも他の内容よりも指導の苦手意識が強く、女子にその傾向が顕著であり、A群が約7割、B群が約

表2 体育の好き・嫌い (%)

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
好き			69.3	78.3	83.9	91.1	51.9	58.3
普通			24.6	18.5	12.9	8.9	38.5	33.3
嫌い			6.1	3.3	3.2	0	9.6	8.3

表3 体育の指導の難易性 (%)

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
しやすい			38.6	30.4	56.5	35.7	17.3	22.2
普通			47.4	50.0	37.1	50.0	59.6	50.0
しにくい			14.0	19.6	6.4	14.3	23.1	27.8

表4 器械運動の指導の難易性 (%)

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
しやすい			24.6	18.5	32.3	23.2	15.4	11.4
普通			60.5	66.3	62.9	67.9	57.7	62.9
しにくい			14.9	15.2	4.8	8.9	26.9	25.7

表5 器械運動の内容別指導の難易性 (%)

内容	項目	性別		全体		男子		女子	
		群		A	B	A	B	A	B
マット	しやすい			42.1	34.8	54.9	39.3	26.9	27.8
	普通			50.0	54.3	41.9	50.0	59.6	61.1
	しにくい			7.9	10.9	3.2	10.7	13.5	11.1
とび箱	しやすい			43.0	30.4	58.1	37.5	25.0	19.4
	普通			46.5	51.1	37.1	48.2	57.7	55.6
	しにくい			10.5	18.5	4.8	14.3	17.3	25.0
鉄棒	しやすい			23.7	18.7	38.7	19.6	5.8	16.7
	普通			35.1	42.3	40.3	51.8	28.8	27.8
	しにくい			41.2	39.0	21.0	28.6	65.4	55.6

6割と指導に困難さを感じる者が多くなる(表5)。

このように鉄棒運動が他の内容よりも指導の苦手意識が強くなるのは、筆者等のこれまでの調査によれば、危険に対する児童の管理の難しさ、教諭自身の技能の未習得からくる指導に対する自信の不足、さらに、学習指導要領改訂に伴う連続技の重視に対する指導経験の不足等が関連しているものと思われる。

(2) 改訂に対する指導の意識の変容

改訂学習指導要領は、昭和55年度から完全実施されており、5年を経過した現在、改訂の趣旨がどれだけ教育現場に浸透しているのか、その一端を探る手がかりとして、まず、改訂に対する器械運動の指導意識の変化・変容を調査した。

現在学習指導要領では、従前と同様、健康の増進と体力の向上を図ることを重視しているが、新たに教科目標の中に「運動に親しませる」が加えられた。運動に親しませ、運動の楽しさや喜びを味わわせることは、「日常生活における運動の継続に連なり、さらには生涯を通じて運動を継続的に実践する態度へと発展させること……」とされ、生涯体育の基礎づくりが強調されている。このため、学習指導要領には随所に「運動の楽しさ、の記述がみられ、児童に運動の楽しさや喜びを享

受させることの重要性が強調されるようになった。

したがって、運動の特性や児童の運動への欲求、授業への期待を踏まえ、その充足の方策を考慮した学習指導の展開が重要となり、教師主体の学習から学習者である児童主体の学習への転換が要求されている。

改訂に対する意識の変化・変容については、男女ともB群よりA群に意識の変化・変容を認める者が多く、男子ではB群の2割に対しA群は7割、女子ではB群の1割に対しA群は5割と、両群間に顕著な差異が認められた(表6)。

具体的な変化・変容として男女の両群とも「学習者主体(児童サイドに立つ)の授業を行うようになった」、「課題のもたせ方が変わった」、「評価の仕方が変わった」などを多く回答しており、これらの教諭においては学習指導要領の趣旨に沿った指導がなされているものと思われる。

本調査のB群は、教職経験年数が5年未満の者であり、学習指導要領改訂直後、あるいは、その数年後に教職についた指導経験の少ない教諭である。したがって、A群よりも顕著に変化・変容を認める者が少なく、また、「わからない」の比率も高いのは、改訂以前の指導経験がないことや器械運動の克服的ス

表6 改訂後の指導に対する意識の変容

(%)

項目	性別	全体		男子		女子			
		群		A	B	A	B		
あ	る			64.0	19.6	72.6	23.2	53.8	13.9
な	し			31.6	25.0	27.4	28.6	36.5	19.4
わ	からない			4.4	55.4	0	48.2	9.6	66.7

表7 克服的スポーツの認識状況 (%)

項目	性別	全体		男子		女子			
		群		A	B	A	B		
知っている				71.9	57.6	93.5	64.2	36.5	38.9
知らない				28.1	42.4	6.5	35.7	63.5	61.1

スポーツとしての認識の欠如等が深く関連しているものと思われる(表7)。

ここで注目すべきことは、改訂に伴い、器械運動が克服的スポーツとして捉えられるようになったことを認識しているにも拘らず、変化・変容を認めていない者がA群では男子約3割、女子約4割いることである。ここにその理由を示していないが、A群の変化・変容を認めていない者のほとんどはこれまでの指導から発想を新たにせず取り組むことの困難さを感じている者である。いいかえるならば、教職経験の長い教諭になる程、これまでの指導経験から積み上げてきた指導体系を脱却できずに、旧態依然とした指導を行う傾向にあるのではないと思われる。

なお、授業への期待については、特に重点を置いたねらいは、男女の両群とも「技能の向上」、「運動の楽しさ」、「いろいろな運動(技)の経験」の3項目に集中している。上記3項目の比率には、女子では両群間に若干の差異が認められるが、男子ではさらにその差異が大きくなり、A群は「運動の楽しさ」、B群は「技能の向上」に意識の傾注がうかがわれる(表8)。

表8 指導における期待 (%)

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
	A	B	A	B	A	B	A	B
技術の向上	41.2	46.7	38.7	55.4	44.2	33.3		
運動の楽しさ	60.5	35.9	62.7	37.5	57.7	53.0		
いろいろな運動の経験	37.7	35.9	38.7	37.5	36.5	30.3		
児童の努力や創意工夫	14.0	12.0	8.1	10.7	21.2	13.9		
その他	3.5	6.6	6.5	10.7	0	2.8		

(重答)

## 2. 器械運動における指導の実態

### 1) 指導計画

#### (1) 年間授業時数

器械運動の年間授業時数は男女の両群とも、「16~20時間」が最も多いが、「16~20時間」及び「21時間以上」を含めて比較すると、男

女とも、A群の方が比率が高い。すなわち、16時間以上授業をしている教諭は、男女とも、A群8割に対してB群6割と、A群がより時間をかけて器械運動の指導をしているのがわかる(表9)。

内容別授業時数では、男女とも、A群がいずれの内容とも「6~10時間」が多いのに対して、B群はマット運動、とび箱運動が「6~10時間」、鉄棒運動が「0~5時間」が多い。また、各内容について5時間未満の授業時数を比較すると、男女とも、A群の方がその比率が低く、各内容とも時間をかけて指導しているのがわかる。男女の両群共通の傾

表9 器械運動の年間授業時数 (%)

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
	A	B	A	B	A	B	A	B
0~5	2.6	3.3	4.8	5.8	0	0		
6~10	7.9	13.0	4.8	7.1	11.5	22.2		
11~15	11.4	25.0	11.3	28.8	11.5	19.4		
16~20	64.9	40.2	62.9	46.4	67.3	30.6		
21時間	13.2	18.5	16.1	12.5	9.6	27.8		

表10 器械運動の内容別年間授業時数 (%)

項目	性別		全体		男子		女子		
	群		A	B	A	B	A	B	
	A	B	A	B	A	B	A	B	
マ ッ ト	0~5	23.7	40.2	25.8	41.1	21.2	38.9		
	6~10	71.9	56.5	67.7	55.4	76.9	58.3		
	11~15	33.5	3.3	6.5	3.6	0	2.8		
	16~20	0.9	0	0	0	1.9	0		
	21時間	0	0	0	0	0	0		
と び 箱	0~5	35.1	56.5	40.3	57.1	28.8	55.1		
	6~10	63.2	43.5	56.1	42.9	69.2	44.9		
	11~15	1.7	0	1.6	0	1.9	0		
	16~20	0	0	0	0	0	0		
	21時間	0	0	0	0	0	0		
鉄 棒	0~5	35.1	56.5	40.3	57.1	28.8	55.6		
	6~10	63.2	43.5	58.1	42.9	69.2	44.4		
	11~15	1.7	0	1.6	0	1.9	0		
	16~20	0	0	0	0	0	0		
	21時間	0	0	0	0	0	0		

向としては、鉄棒運動が他の内容よりも授業時数が少ないことである(表10)。

これには指導の苦手意識などが関連しているものと思われる。

(2) 指導における重点内容

器械運動の内容のうち、教諭が何に、特に、重点を置いて指導するかは、学校や児童の実状、さらには、教諭本人の各内容に対する技能の有無、指導方法の習熟の程度等が深く関係してくるものと思われるが、重点の置き方は男女の両群とも多岐わたっている。しかし、各内容の比率をみると、A群の男女の方がB群より平均化した傾向がみられる(表11)。

(3) 単元構成

単元構成は、運動領域の特性や児童の心身の発達状況等に応じて考慮されるべきものであるが、教諭の単元構成の方法としては、男女の両群とも、器械運動と他領域とを組み合わせる場合が多く、男女とも、A群にその傾向が強く認められる(表12)。

器械運動と他領域とを組み合わせる単元構成では、男女の両群とも、体操が最も多く、これに次いで、男子は両群とも陸上運動が多い。女子はA群では陸上運動、B群ではボール運動が多い。

表11 学習指導における重点内容 (%)

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
マット			22.8	33.7	24.2	33.9	21.2	33.3
鉄棒			26.3	16.3	27.4	17.9	25.0	13.9
とび箱			23.7	27.2	19.4	21.4	28.8	36.1
各内容同等			23.7	18.5	22.6	19.7	25.0	16.7
その他・無回答			3.5	4.3	6.5	7.1	0	0

表12 単元構成の方法 (%)

項目	性別		全体		男子		女子	
	群		A	B	A	B	A	B
器械運動のみ			21.9	42.4	25.8	39.3	17.3	47.2
他領域との組み合わせ			78.1	57.6	74.2	60.7	82.7	52.8

表13 単元構成の方法 (他内容及び他領域との組み合わせ方) (%)

項目	項目	性別		全体		男子		女子	
		群		A	B	A	B	A	B
他内容との組み合わせ方	マット運動と鉄棒運動			0	22.6	0	4.5	0	0
	鉄棒運動ととび箱運動			88.0	22.6	12.5	4.5	0	0
	とび箱運動とマット運動			52.0	59.0	43.8	40.9	66.7	82.4
	3つの内容をまとめる			0	2.6	0	4.5	0	0
	1つの内容のみ			40.0	33.3	50.0	45.5	33.3	17.6
他領域との組み合わせ方	体操			69.7	64.1	80.4	55.9	58.1	78.9
	陸上運動			47.2	41.5	56.5	55.9	37.2	15.8
	水泳			1.1	0	2.2	0	0	0
	ボール運動			19.1	34.0	13.0	23.5	25.6	52.6
	表現運動			23.6	18.9	30.4	14.7	16.3	26.3

(重答)

器械運動のみの単元構成では、男女の両群とも、同様の傾向であり、両群間に差異は認められなかった。すなわち、両群とも、マット運動・鉄棒運動・とび箱運動の各内容を別々に切り離して取り扱う場合と、とび箱運動とマット運動との組み合わせの場合が多く、鉄棒運動と他の内容との組み合わせは少ない(表13)。

(4) 単元の配列

単元の配列については、男女の両群とも、ほとんどの教諭が各学期にかたよりがないように配列しており、両群間に差異は認められなかった(表14)。また、単元の配列の類型としては、男女の両群とも、長期分散型が多く、次いで、短期集中型が多い。類型の比率には差異が認められ、長期継続型では男女とも、A群にその比率が高い傾向がみられる(表15)。

なお、本調査にあたっては、3つの類型を次のように分類した。

「短期集中型」とは、各学期にわたって指導するにしても、また、特定の学期のみで指導

するにしても、ある期間に集中的にまとめて指導することを示すものである。「長期分散型」とは、各学期及び特定の学期のみの指導においても、各月毎に振り分けるなど比較的分散させて指導することを示すものである。また、「長期継続型」とは、児童の1回の学習時間を短くして、かなりの長期にわたって指導することを示すものである。

配列の類型は、器械運動の内容、各内容における種目の難易度や運動の強度等も関係してくると思われるので、今後はこれらの関連も追究していきたいと思う。

表14 単元の配列 (％)

項目	性別群		全 体		男 子		女 子	
	A	B	A	B	A	B	A	B
ある学習のみ	0.9	5.4	1.6	3.6	0	8.3		
2つの学期	9.6	14.1	8.1	16.1	11.5	11.1		
各学期にわたって	89.5	80.5	90.3	80.3	88.5	80.6		

表15 単元の配列の型 (％)

項目	性別群		全 体		男 子		女 子	
	A	B	A	B	A	B	A	B
短期集中型	33.3	37.0	33.9	35.7	32.7	38.9		
長期分散型	41.2	50.0	43.5	51.8	38.5	47.2		
長期継続型	25.4	13.0	22.6	12.5	28.8	13.9		

## 2) 学習形態

学習形態については、男女の両群とも、各内容においてグループ学習が多く、両群間に顕著な差異は認められなかった(表16)。

また、グループ編成の仕方では、男女の両群とも、マット運動及び鉄棒運動は異質のグループで、とび箱運動は等質グループで編成することが多く、両群間に顕著な差異は認められなかったが、女子のB群にその傾向が強くみられた(表17)。

グループ編成の仕方では、男女の両群とも、等質グループ及び異質グループに男女混合か男女別かを加味すると、器械運動の内容によ

表16 器械運動の内容別学習形態 (％)

内容	学習形態	性別群		全 体		男 子		女 子	
		A	B	A	B	A	B	A	B
マット	グループ学習	92.1	80.4	100.0	82.1	82.7	77.8		
	一斉学習	7.9	19.6	0	17.9	17.3	22.2		
とび箱	グループ学習	83.3	72.8	82.3	80.4	84.6	61.1		
	一斉学習	16.7	27.1	17.3	19.6	15.4	38.9		
鉄棒	グループ学習	78.9	72.8	87.1	75.0	69.2	69.4		
	一斉学習	21.1	27.2	12.9	25.0	30.8	30.6		

って若干の差異が認められるが、ここでは、さらに男女混合か男女別に着目して比較検討してみた。A群の男女とも、各内容においてB群よりも男女混合グループが多い傾向にある(表18)。

上記のグループ編成の仕方では、各内容の運動の技術構造や指導のねらい、課題の与え方・もたせ方など指導のあり方、技能・体力における性差、学年等が関連するものと思われるが、この問題点は今後の追究課題としていきたい。

## 3) 学習課題

改訂学習指導要領では、器械運動は水泳とともに克服的スポーツとして捉えられるようになり、課題については「自己の能力に適した課題をもって……」と明示されている。これは、児童各自の技能の程度に応じた楽しみ方を体得させたいとの考えからである。

児童の誰もが楽しめる器械運動にしていくためには、できる・できないをめぐって、能力に応じた克服の対象としての課題の選択が重要になってくる。

そこで、この趣旨がどれくらい浸透しているのか、学習課題の設定の面からその一端を探ろうと試みた。

主に個人的課題を設定しているとする教諭は、男子のA群8割に対してB群7割、女子のA群7割弱に対してB群7割と、両群間に顕著な差異は認められなかった。しかし、2割～3割の教諭が個人的課題を設定しないで、

表17 器械運動の内容別グループ編成(1)

(%)

内容	性別		全 体				男 子				女 子			
	グループ編成	群	A		B		A		B		A		B	
マ ツ ト	異質グループ	男女別	59.0	16.2	68.9	33.3	59.7	14.5	58.7	21.7	58.1	18.6	85.7	53.6
		男女混合		42.8		35.1		45.2		37.0		39.5		32.1
	等質グループ	男女別	41.0	21.0	31.1	20.3	40.3	19.3	41.3	28.3	41.9	23.3	14.3	7.1
		男女混合		20.0		10.8		21.0		13.0		18.6		7.3
と び 箱	異質グループ	男女別	44.2	12.6	34.3	16.4	41.2	7.9	37.8	15.6	47.7	18.2	27.3	18.2
		男女混合		31.6		17.9		33.3		22.2		29.5		9.1
	等質グループ	男女別	55.8	25.3	65.7	31.4	58.8	27.4	62.2	31.1	52.3	22.7	72.7	31.8
		男女混合		30.5		34.3		31.4		31.1		29.6		40.9
鉄 棒	異質グループ	男女別	57.8	14.5	59.3	25.4	51.9	13.0	54.8	19.1	66.7	16.7	70.6	41.2
		男女混合		43.3		33.9		38.9		35.7		50.0		29.4
	等質グループ	男女別	42.2	18.9	40.7	22.0	48.1	16.6	45.2	28.6	33.3	22.2	29.4	5.9
		男女混合		23.3		18.7		31.5		16.6		11.1		23.5

表18 器械運動の内容別グループ編成(2)

(%)

内容	性別		全 体		男 子		女 子	
	グループ編成	群	A	B	A	B	A	B
マ ツ ト	男女別グループ	男女別	37.2	54.1	33.8	50.0	41.9	60.7
		男女混合グループ	62.8	45.9	66.2	50.0	58.1	39.3
と び 箱	男女別グループ	男女別	37.9	47.8	35.3	46.7	40.9	50.0
		男女混合グループ	62.1	52.2	64.7	53.3	59.1	50.0
鉄 棒	男女別グループ	男女別	33.1	47.4	29.6	47.7	38.9	47.1
		男女混合グループ	66.6	52.6	70.4	52.3	61.1	52.9

表19 個人的課題の設定状況

(%)

項目	性別		全 体		男 子		女 子	
	群	群	A	B	A	B	A	B
設定している			73.7	71.7	79.0	71.4	67.3	72.2
設定していない			26.3	28.3	21.0	28.6	32.7	27.8

表20 学習カードの使用状況

(%)

項目	性別		全 体		男 子		女 子	
	群	群	A	B	A	B	A	B
使用している			42.1	37.0	43.5	28.6	40.4	50.0
使用していない			57.9	63.0	56.5	71.4	59.6	50.0

主に学級全体の課題やグループの課題、つまり、児童の共通の一定課題のもとで、その「できばえ」を求めているという旧態依然とした授業を行っているのがこの結果からうかがわれる(表19)。特に、A群の男子の場合には、器械運動を克服的スポーツとして扱うという改訂の趣旨を十分に認識しているのにも拘らず、指導の発想の転換をできずにいる姿が推測される。これに対して、女子の両群の場合には、克服的スポーツの認識が薄く、改訂の趣旨を充分認識していないことがこの結果に結びついたものと思われる。

なお、器械運動の内容別の学習課題として、どのような単独技や連続技が授業中に展開されているか。これについては、今回標本が少数であるため、両群間の比較は困難であった。

器械運動を克服的スポーツとして扱うという考え方に立つと、児童が自己の能力を確かめ、その能力に応じた課題に向かって練習できるように、また、自己の進歩の度合い、課題の到達度等を把握するためには、その拠所となる学習カードが必要になるとと思われる。そこで、授業中の学習カードの使用状況についても調査した(表20)。

学習カードを使用している教諭は、男子ではA群4割に対してB群約3割と、A群の方が学習カードを多く使用している。これに対して、女子ではA群4割に対してB群5割と、男子とは逆に、B群の方が多く使用している。

しかし、男女の両群とも、5割かそれ以上の教諭が学習カードを使用していない状況にあり、これらの教諭のうち、特に、個人的課題を設定している教諭は、どのようにして、児童各自に自己の能力を確かめさせ、課題をもたせているのか、また、課題達成の評価はどのようにさせているのか等大きな疑問点に直面する。

内容別の学習カードの使用状況及び学習カードを使用していない理由は、ここには示していないが、鉄棒運動が他の内容よりも多い傾向がみられた。また、学習カードを使用していない理由としては、男女の両群とも「時間的余裕がなく、学習カードを作成できない」が多く、両群間には差異は認められなかった。

### 要約及び今後の研究課題

本研究、第2報では小学校教諭の器械運動の指導に対する意識とその指導の実態及び学習指導要領の改訂の趣旨の指導への影響等について、教職経験別に調査分析した結果、次のような結果と結論を得た。

1. 器械運動及びその内容別指導の難易性では、男子に差異が認められ、教職経験の長い教諭に指導に対する強い自信がうかがわれた。

2. 学習指導要領改訂後の指導に対する意識の変化・変容では、教職経験による差異が認められ、男女とも、教職経験の長い教諭に変化・変容を認める者が多い。

3. 器械運動の克服的スポーツとしての認識状況では、男子に差異が認められ、教職経験の少ない教諭に認識の欠如していることが認められた。しかし、女子では教職経験に拘らず、その傾向が認められた。

4. 器械運動及びその内容別の年間授業時数では、男女とも、教職経験による差異が認められ、教職経験の長い教諭の方が少ない教諭よりも時間をかけて指導していることが認められた。

5. 単元構成、単元の配列、学習形態及びグループ編成には、教職経験による顕著な差異は認められなかった。

6. 学習カードの使用は、男子は教職経験の長い教諭、女子は教職経験の少ない教諭が多い傾向にあり、教職経験による差異は男女により異なることが認められた。

7. 改訂学習指導要領の趣旨の指導への反映として、その一端を克服的スポーツの認識状況、学習課題の設定等に見ることができ、教職経験の有無に拘らず、尚一層、教諭が児童の立場に立って、克服的スポーツとしての認識のもとで、器械運動を指導する必要がある。

この意味から、児童各自の能力に応じた学習課題の設定、その学習のめあてになる学習カードの作成等指導における創意・工夫が期待される。

今後の研究課題としては、本研究の標本数が少なく、詳細に分析できなかった項目もあるので、さらに標本数を増やして継続研究をすすめていきたい。

また、本研究は器械運動の領域から指導の一端を比較検討したにすぎないので、他領域からも調査分析していきたい。

### 参考文献

- (1)文部省：小学校指導書体育編，東陽館出版社，1969，5
- (2)文部省：小学校指導書体育編，東山書房，1978，5
- (3)前川峯雄他：小学校学習指導要領の展開，体育編，明治図書刊，1977，9
- (4)前川峯雄他：小学校新学習指導要領の解説と展開，体育編，教育出版，1977，8
- (5)文部省：小学校学習指導要領，大蔵省印刷局，



1977, 7

- (6) 穂田清他：小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識（第4報）－器械運動の技能の実態－，日本体育学会，第30回大会号，1979，10
- (7) 森清他：小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識（第4報）－器械運動・ダンスの領域を中心として－，文教大紀要14集，1980，
- (8) 森清他：小学校教諭の体力・技能と教科体育への意識－文部省科学研究費補助金による調査研究報告－，1982，3
- (9) 阿部正臣：運動領域からみた教科体育の意識（第1報）－器械運動を中心として－，1983